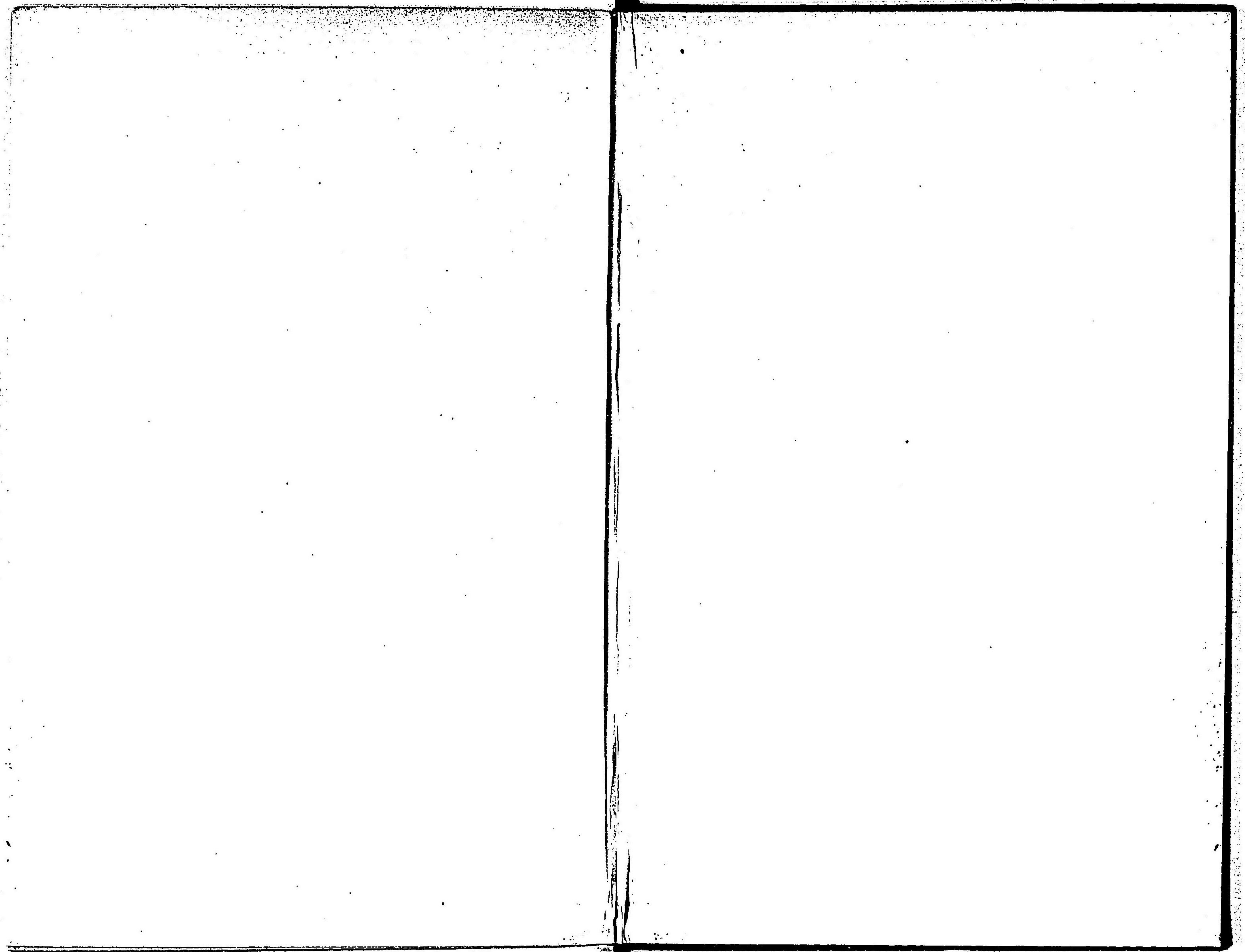


新
松
風
詩





特22

112



風



松風を語る

寂たる一室に孤影つくねんとして無想の夢に遊べば、遠くく、松風の音のみぞきく。昔を吹きし此の松風、今もなほかはらで、法の聲、聲あつて高く、聲の色、色あつて色なく、曲なき曲に無限無窮の境界は澄みて、遂にわが肉塊は、谷千尋の底深きに寝て、心霊は、空に白雲を往來し、寂寞の裡に深玄の道暖かに胸の戸は静かなり。さりとては轉た今昔の感にたえざるもの、げにやこれ人間、松風を語つて。

白葉

自序

人、既に詩を語つて足る。詩は直覺すべきものにして、説く可からざるものなり、と、余はまた今此處に何等云ふところなしと雖も、今歳風冷え蟲なくの夜、靜かに觀ずれば、詩の極致こそ一なれ、其形に於ては一二にとゞまらず。歡樂の詩、哀愁の詩、憤怒の詩、悲痛の詩、千差萬別、大洋に躍る波に似たり。寒に當つて熱となり、熱に觸れて寒となるもの、蓋しこれ詩ならんのみ。

詩は精に生く。冥想恍惚の際、宇宙の一員た

る我、吾を知りて、詩境の湧然として起る時、精神其處に之けば、天地位して詩に聲あり、萬物備りて詩に彩あるなり。これを芳草に香らしめ、これを秋風に泣かして、格調を得可し。

古來新詩の妙を待つの人多からざりしは、故ありしならんも、時勢の支配に従ひしは論無きに似たらん。然れども日新の初光に、其稍やあび來りしは、つとめてよろこぶ可きところなり。

この書は、余が聊か詩の何物なるかを試みしものなるのみ、淺學疎才、人を立たしめ人を

坐せしむるの鬼才なく、これを示す愧づるあるも、一人小燈の下につくねんとして寂寥の感に打たる、深夜、つれづれなるまゝに讀みもて行かば、遠く松風の曲に、若し一番言外の意を看取して、一燈千年の闇を破るの感起らんか、と此の如く。

庚戌秋十月 冷風玉露を拂ふの夕

野末の草庵にて

白葉識

新詩、其半數は、明治四十二年の稿にかゝりて、半數は庚戌の年之を作る、何れも拙作、公にするを愧づるのみ。
著者

松風目次

新	年	一				
立	て	よ	三			
風	吹	か	ば	吹	け	六
木	枯	一〇				
朝	顔	二				
磯	の	夕	三			
野	薔	薇	七			
行	く	春	九			
初	秋	二				
ゆ	ふ	へ	の	百	合	三
朝	日	五				

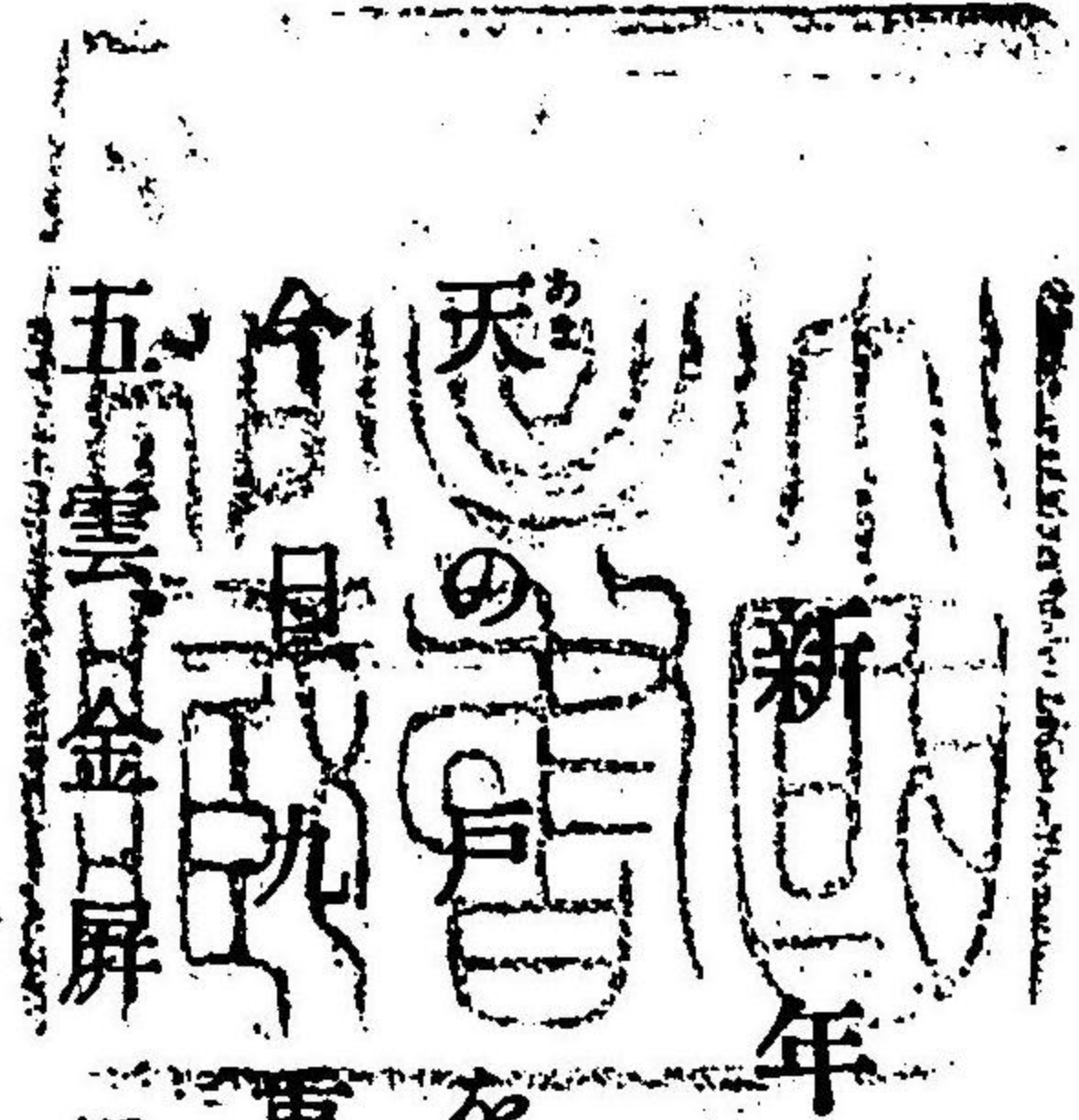
秋の深夜……………二七
 山吹……………二九
 秋の川……………三一
 春と花……………三三
 詩人と四時……………三六
 夕榮の山……………三八
 風中の星……………四〇
 白菊……………四三
 枯野……………四五
 朝の白百合……………四八
 蟲の音……………五〇
 寒月……………五三
 散行く花……………五五

墓所……………五七
 紅葉……………六〇
 人の世に……………六二
 秋木……………六五
 白雲……………六八
 わが身の秋……………七一
 日の出……………七五
 さび行く秋……………七八
 梅……………八二
 枕べに……………八五
 五十の夕……………八七
 松風……………八九
 墓前に立ちて……………九一

花と蝶	九三
過ぐるを痛む	九五
躑躅の花	九八
枯櫻	一〇一
夜と思	一〇三
堇	一〇五
鳥部山	一〇八

目次……………終

新松風詩



世は新玉の天高く
 五重の奥深く
 金屏にたなびきて

鶏旦四海静かにて

浪に花咲く新潮の
國も治まる時津風
野の残雪にゆるやかに
年の初日の新ま神ごが
輕羅の袖を地に引けば
野づら山づら香に匂ふ
ゑまひめでたきみ世なれや
人のこゝろはやはらぎの

春芳草に舞ひ出でよ
生命長閑き君が世に
千代吹き添ふる松の風

立てよ

天地二つに引きさけん
折しも曉聲鐘一つ
希望を告げて響く時
立てよ、神州日本子よ

胸の刀に錆あれど
心の油汲み取りて
磨かば玉の正宗の
汝が名刀ぞ輝やかん
汝が行く路を移さず
おもひ、一條踏み行かば
天の岩戸に雲晴れて
なれに天道、光りあり

汝が後ろには守神あり
汝が前へには悪魔あり
汝がこゝろ根の弱からば
悪魔の手にぞひかれなん
彼も人なり我も人
人に差別はなきものを
名を成功の月桂冠
汝が手にせよや日本子よ

天 中 高 く 嘯 き て
下 界 の 夢 に 鞭 打 ち て
み づ か ら 招 げ 幸 福 を
み づ か ら 作 れ 運 命 を

風吹かば吹け

風 吹 か ば 吹 け 世 の 中 の
か よ は き 風 や 何 か せ ん
昔 も 今 も 風 通 ふ

道 行 く 我 を い か に せ ん
岩 碎 か ん と 聲 揚 げ て
よ せ て 碎 け て か へ る 波
か へ よ 濁 り し そ の 水 を
赤 岩 な ど か 碎 け ん 哉
碎 け ぬ 心 わ が 玉 の
玉 の 心 に 光 り あ り
玉 を 碎 か ん 彼 の 心

心の玉に光りなし
光りもつよき秋の月
ゆふへ黒雲に蔽はるも
いつしか出づる天の原
ふりさけ見れば春日なり
春日の野邊に咲く花に
あしたに霜をおくつきの
主のその名はとことばに

よどみはせぬぞ天の道
木の下かけを流れ来る
さだめつめたき雨水も
出でよは清き谷川に
風吹かば吹け濁りなし

* * * * *

* * * * *

木 枯

天は凍りて地は乾れて
疎林の月に色香なく
枯瘦の裸形寒ければ
木枯たかし小夜中に
鐘の音とぎれ且つ迷ふ
廢祠の軒を吹きすさぶ
夕山おろし白うして
寂寥やれて音すごし

死 騎 三 百 嘶 いて
闇をあらそふ木枯の
雲ふきちらし落葉蹴り
聖者の世をかすめ行く
冷えにし翼身にかりて
夜 亂 山 に あ ら び て は
世はみだれて世は泣いて
あゝ 晩 秋 初 冬 か な

朝顔

花の小鉢を蔓は縫ふ
紫笑ふあさがほの
垣根たよりて井戸端に
今年も「つるべ」とくとりて
なよく細きなが腕を
手切るとすれどいとしうて
鬼のわが魂蝶と飛び
しばしは此處にをとめあり

琴の小窓に夢と入る
ゆふべの星と色あせて
露さへきよく影匂ひ
みどりの鬢は姫とまで

磯の夕

黝然凄き波の色
波うつ際に月碎け
碎けて散るか玉の金
散りて流れて松が枝に

ゆふべの花と咲く星の
亂れて清き磯の空
空にこゝろも佇ずめば
雲間を出づる風きよし
清きに歌ふ松の聲
聲や波間の沖の舟
月の光りの下漕げば
帆は仄白く海に星
星にも似たる島影の
影もうつらう海鳥の

埒にかへる波に波
波を色どる彩雲の
ゆふべを急ぐ波の上
波も流るゝ空の上
仰げはきよき神の園
伏せば尊き佛ぶつの園
見よ、うるはしき此の漁村りしむらを
聞け、さびしき磯の風
今世の法を解き吹けば
たゞ鞆たづと答ふ波

波に色添ひ照りわたる
萬里の月に我澄めば
漁家の燈火いと涼し
すゞしきこゝろ酔ひこゝろ
浮世に得んと泣く子等は
涙の袂こゝろに振れ
憂ひの杖をこゝろに引け



野薔薇

今を春邊と薰り來る
野ばらの花の紅るの
幽に笑める唇の
こゝろや何をおもふらん
昔と今の憂露の
しとゞにたえしなれが頬は
暖きなさけかげ見えて
操の雫滴るか

みどり敷きたる布野中
蒼きみ空の夢とめて
とはに事なきさだめもて
盡させぬ生命ゆるやかに
天つ乙女のかんばせに
ゆかしき匂ひ襟に秘め
世にも美なる安げなる
野薔薇の姿誰も見よ

行く春

霞に消ゆる蝶のかけ
力なき日に泣く蟲の
青葉がくれに散る花の
色も香もなく行く春や
うらみに老いぬ鶯の
聲も谷間にさびゆきて
風たそがれて雲迷ひ
鐘の音さへもおぼろにて

むなしき枝にかへる日の
名残りには花の夢さめて
夕戸にかゝる春の暮れ
ゆふへみ空に月ぞ憂き
光り長閑き山川に
今寂滅の色みちて
運命かなしき春問へば
まこと一時の夢にして

初 秋

新風すゞし我庵の
桐の一葉に秋立ちて
門田の稲葉ゆたかにて
法師蟬鳴き空高し
秋まだあさき草堂の
やれたる壁に蟲の音の
残暑にほそき秋の日や

こゝろの空に雲もなく
萩の葉の上に月あかき
ゆふべささやくいささ川
汀にきよき玉露に
扇わするゝ初秋や
葱の軒の初霜に
亂れそめたり菊の花
書窓の友と顧みて

あゝ今日よりは文を見ん

ゆふべの百合

夕うす月の山間に
星かやどりし小百合花
塵の世界をのがれ来て
無想のゆめに今入るか
女神のかむり、露重く
露もてかざる花の香の

落^{おち}日^ひ諸共入る夢路
夢路に何をおもふらん
君がみ名呼ぶ清水かけ
雪かと白う色晴れて
つくねん立ちし清き身は
まことゆかしや想夫戀
風に流れて通ふ香の
いづく彼の世の花と咲く

此の世の星か百合の花
やがては星とかたるらん

朝日

紫にほふ山間を
あづまじさして上り來る
木梢隙洩る朝日影
紅葉色なすそれのごと
暫したゆたふそのすがた

日本男の子の氣を引けば
やがて希望の笑みの面
くれなる染むる花のごと
夢路に枯るゝ萬物の
つゆの生命を甦し
白き炊煙の雲に乗り
下界の意馬に鞭打ちて
輕ろき翼に風飛べば

涼しき朝日閃いて
海に林に野に山に
めでたき力光りあり

秋の深夜

星河一天、夜は老けて
人界今は遠けれど
悲壯の風は音もなく
秋の夜深う夢寒し

寂寞の色はこゝにみち
月に心は闇と更け
八千草冷えて蟲泣けば
灯ともしびくらし露しげし
秋氣流れて水と冷え
こほれば結ぶ宵の霜
冴えて野寺に白ければ
砧さびしう音ほそし

天地静かに叫けば
昔と今の鬼二つ
寢覺の夜深き窓の外
ながき別れのものかたり
風肅々と過ぎ行けば
枕に落葉おとかなし
あゝ懐舊の涙もて
深夜秋思に夢破れて

山吹

雨にゆめ覺め春に起き
こがねの玉とほこる面
姿かざせば色も香も
露さへ香る七重八重
花にさを立て露を漕ぐ
み空の星に色添へて
軒の玉水よびとめて

生命ゆたかに影すみて
今をわが世と咲きそめて
賤がわが家に春深き
折る袖にほふ山吹の
一枝を君にまゐらせん
あゝおもへばその昔
わが大丈夫道灌が
七重咲き八重「實」のなきに

恥づてふ雨に濡れしとか

秋の川

落葉に霜の鞭打てば
さゝやく聲もいと細う
夕の流れ水痩せて
衣手寒し衣川
夕波寒く風立てば

岸の枯葉に泣き咽ぶ
蟲の枯音にともかれし
水面の月になごりもて
鷓鴣飛ぶ影のあと追ふて
蝶の亡骸はこびゆく
憂ひの流れ盡きずてふ
運命冷めたき秋の川
流るゝ岸に咲く花に

問ひつ問はれつ流れけん
春は流れて夢いづく
あゝ問へども語れども

春と花

春の静かに草もえば
吾世は春と花は云ふ
花の静かに色添へば
吾世は花と春は云ふ

春の彌生に咲く花の
花より花に花は縫ふ
花の色香のいや添へば
春今こゝに生命あり

花の色香に生く春の
春より春と春は笑む
春の光りの照り添へば
花今こゝに希望あり

花を見てこそ春なれや
春を見てこそ花なれや
春と花とは袖ひきて
光り目出度く生り出でぬ

* * * * *

春は静かに瘦せ行けば
春は仇なりわが花よ
花はちりちり散り行けば
花は仇なりわが春よ

詩人と四時

春 大洋に風ゆるく
花に胡蝶も歌へなば
詩人よともにくたふらん
あたゝかなれや君が胸

夏 青山に雲おちて
百鳥空に涼みなば
詩人よともにくたふらん
涼しかるらん君が胸

秋満山に紅葉の
ちりちり散らば諸共に
詩人よ君も散り行かん
君くれなるの血に泣かん
冬眞白き銀界に
朝日照り添ひ光りなば
詩人よ君は微笑まん
君がころろは白からん

詩人と四時いかなれば
いかなる縁に立つものや
自然よなれがふところに
詩人の夢を宿らせよ

夕榮の山

夕榮西に今美えて
山の端紅雲浮き流れ
山の上黄金花咲きて

彼の世の夢の春のごと
いとも静けくにぎはしき
妙へなる空の山々は
火衣高く袖上げて
呼ぶか此宵の月姫を
ちぎれくに雲迷ふ
大空高く雲に吼え
世界の旗をふり揚げて

世界の人を酔はしめて
見よ、夕榮の山の色
偉人の姿に似たらずや
人のゆふべに色添へて
やがてしづかに消え行くを

風中の星

南北 悲愁 風寒 ぐ

今はた凄し歩哨兵
十八年の鐵腕よ
與ふか眠り一瞬時
一瞬の眠り長くして
あはれベンニユウ幸なりき
夜は故山に風立ちて
悲鳴にむせぶブラッサム
唯一秒の眠りより
受けし涙の文あきしげき

涙の文は繁くして
あはれベンニユウ幸なりき
暗くらに邸園は雨誘ふ
嵐あらしに寒きリシコルン
一ひと小女の言の葉に
ああぐるる涙の露繁あはき
涙のつゆのしげくして
あはれベンニユウ幸なりき

陣雲暗きあめつちに
鼓聲を立てゝ旗あげて
母山を後に義を前に
露の生命の庭に出で
こゝに眠るか眠らざる
あはれベンニユウ幸なりき

白菊

たかきかをりに身をしめて

ゑみしおもわにつゆをもて
甘き香に酔ふ朝の香の
にほふ園生に生れし菊
あしたの星に初霜の
置まどはせる白菊の
一枝を折らば夢覺めて
二枝を折らば酔ひぬらん
小さき操色晴れて

嫋びすがたは秋の夜を
ゆめにうれひし小女子が
涙に咲きしそれのごと
花に日影の消え行けば
闇にも白う通ふ香の
月にこと問ふ白菊の
ゆかしき心あはれなり

枯野

尾花が袖につゆしげき
秋のなごりをおもひくさ
風にあへなく色ちりて
霜がれにけり枯野原
枯野十里を夕つ方
鴉みだれて空ひくさ
雲に消え行く瘦馬子の
小二郎寒し蟲に風

芒に玉の露の星
運命冷めたき枯野原
死滅の相を今語る
枯音さびしや夕まぐれ
思へ、昨日は花の園
見よ、今日ははや枯野原
暫しはしのべつらくとも
無想の夢に入らしめん

朝の白百合

理想したゞる白露に
希望にみてる身をこめて
希望にみてる玉露に
理想したゞる身をしめて
白百合此處に生命あり
朝風早く薫り來て
あづまの光り照り添へば
こゝにうたふてこゝに舞ふ

姿と聲と世に晴れて
白百合此處に色香あり
夢の眠りの疾く覺めて
一日の契り山川に
問ひて答へて結びては
理想の空の雲に笑む
白百合此處に心あり
實にも目出度き朝の百合

鹿の聲斷つ奥山の
谷間の淵に汝あるも
我は訪はなんとこしへに
他も訪はなんとこしへに

蟲の音

月にふけ行く小夜衣
縫ふ蟲の音の糸細く
いふせき旅のかりやどの
脊戸につめたくむせびては

まこと人生行路難

月洩る壁に蟲の音の
古きしらべは賤の女が
十三絃を横に斷つ
細き恨みのそれにして

蓬河原に月ほそく
泣く蟲の音の果敢さを
浮世の人の身にきけば

詩人に愁思ひや長し

風がもて來るおもひでに
また添ふ夜の蟲の音の
觀音堂に高げれば
自然の節奏哀れなり

*
*
*
*
*
*

*
*
*
*
*
*

寒 月

氷輪、無爲の天の上に
無限の生命光りもて
萬里の世界照らしては
下界も今は夢^ま聖^{せい}し
清光、湛寂の潭の底
流れをとめて佇^たずめば
眞如の月の影二つ

それ我もなく物もなく
夜なほ晝とまがふまで
煩惱妄執の闇晴れて
天魔の姿影消えて
諸法の光り月すみて
千草に星を呑む露の
生命事なく玉とまで
星河一天、月牙えて

霜の衣に安らけく

散行く花

露の生命に風立てば
涙に色香散りて行く
花の裳裙や袖重く
世相常なき此の運命
あしたの鐘に花咲けば

ゆふべの花に鐘鳴りて
花の生命のあさぼらけ
散るところそ聞け咲ける間も

風たそがれて力なく
吹く音青葉にしめる時
胡蝶の姿うつろひば
夕戸にかゝる桃の花
春や昔の花の身の

榮花の夢を夢と見て
訪ひ來る蝶と袖わけて
夕の露と袖ひきて

色は匂へど散りぬれば
ちりにし花のちりし色
散りにし花のちりし香の
あゝ匂へどちりぬれば

墓 所

五體は墓に石と化し
血しほは石に苔と染み
ながきうらみは吹く風に
音なく通ふ墓どころ

悲愁に闇の香の冷えて
こほりし魂にゆめ寒く
十方界に鳴る鐘の
響きも迷ふ墓どころ

古きしらべになく鳥の
聲もあはれに木のかげに
昔のおもひしげくして
音なく沈むさびしみや
訪ふ人間の足跡も
たえて百年の草茂く
つゆにむしのね長かるに
あゝ月光ほそうせば

紅葉

秋聲高く空遠く
かりがね月にかたらひて
秋をにしきと織りなせば
金碧くしき紅葉山
松の木の間を射る色の
岸にうつらふにしき波
流るゝ二葉ちる一葉

湖邊の紅葉色あせて

火衣纏ふ秋の神

黄金の鞭をふり上げて

朝日のかげにながむれば

萬山、秋の花もみち

紅葉をくゞる鐘の音の

夕日のかげにおとづれば

盛者必衰これもまた

あゝやがては是非もなく

人の世に

意馬、六塵の庭の荒れ

心猿、五慾の枝に群れ

世は混沌の塵深く

空に黒雲搔き亂れ

自滅の聲の高き時

峰吹く松の風の曲

祇園精舎の鐘の音
限なく響け人の世に

世に因果てふ風立ちて
浮き立つ思ひ果て沈み
はやる心の此處に止み
坐ろに今日を想ひ出で
静かに明日を思ふ時
峰吹く松の風の曲
祇園精舎の鐘の音

限なく響け人の世に
燈火くらき小夜中に
精靈の浪、風立ちて
星一天にさゝやきて
草葉のかげの蟲の音に
つめたきおもひ繁き時
峰吹く松の風の曲
祇園精舎の鐘の音
限なく響け人の世に

世は烏羽玉の闇衣
色も香もなく音もなく
天地、天地に迷ふ時
我、今世の果をおもひ
安堵の神に謝する際
峰吹く松の風の曲
祇園精舎の鐘の音
隈なく響け人の世に

秋 木

萬雷吼ゆるこがらしに
死滅の園に翺られて
そこに生れし秋の木や
ゆふべの裸形寒からん
眞夏、大野を覆ひたる
國つ鎮めの公孫樹
天魔の霜のふところに
空しく入りて夢冷えて

音なき夜半に月瘦せて
影も梢にすぎきまで
無常の相を現じては
昔のおもひいかにせん
あゝこがらしよ心して
つよくなふきそ秋の木に
つめたきうれひいやながき
詩人の夢もこもるらん

白雲

恨みの涙雨止みて
希望の日光映え出で
精氣わが世にみちし時
見ずや、天上に白雲を
怒りの叫び、風風ぎて
黒雲いつか、かけ散りて
平和の色の清き時

見ずや、天上に白雲を
み空を纏ふ天神の
長き銀帯のそれに似て
尊き姿、空に晴れ
あしたの月を孕むごと
崇高き色にほゝるみの
心にゆるき生命もて
悠悠下界を眺めては

幸なき子等に幸の夢
風ゆるやかに吹き行けば
雲、潔白の翼もて
塵なき園に飛んで舞ふ
優々しき姿、君見ずや
眺めゆかしき山川の
空に白雲を仰ぎなば
心飄々、主無く

魂 天 中 に 上 る ら ん

あゝ 純 潔 の 白 雲 よ
な が く 一 天 に 屯 し て
あゝ 純 潔 の 白 雲 よ
な が く 一 天 に 屯 し て

わが身の秋

世 は 春 な り や 秋 な り や
あゝ 人 生 の 頼 み な さ
頼 み な き 世 を た の み つゝ

頼 み な き 世 を な げ き つゝ
昨 日 と 今 日 と や る 瀬 な き
廣 澤 深 き 深 水 に
五 尺 の 身 體 舟 う け て
心 に 梶 を 鳥 部 山
鳥 部 の 山 の そ れ よ り は
行 く と こ ろ な き 人 間 の
つ た な き さ だ め う つ し 世 に
う つ し 身 一 つ 生 命 も て
前 後 二 世 に ね む る 身 の

此の今の身も亦ゆめか
いかなればかく花咲か
いかならばかく實もなら
空あかに春の世おくるかは
春はむかしのゆめなれや
夢にも似たる秋か今
わが世淋しく風冷えて
千々に物こそ悲しけれ
あはれ立枯れの朽ちし木に
花も咲かねば鳥訪はず

夕に闇を待つ身の
心に月は曇らねど
月の歩みに時の命
無常の聲のたかければ
たゞなきになくなきの身か
それ痛恨の血を吐いて
有情のゆめを招げども
無情の風は高吹いて
有爲轉變の世の中を
あゝいかにせんすべもがな

日の出

水天、こゝに夢覺めて
端無き波濤仄白く
横たふ雲の燦りて
水平線は今静しずか
己に曙光の時來れば
晨の星は花と散り
弦月、水と空の外そと

聲なき聲は今満ちぬ
曉冷えて風行けば
あづまの空に雲剥はけて
沖つ白浪さゞめきて
うたふ平和の聲の色
見よ、東海の神の園
秒また秒くれなるに
波よりのぼる空の色

空よりおつる波の色

それ大なる金玉の

忽然空に水蹴りて

億萬線の金の絲

ひくか一瞬あめつちに

あゝ日の出の一瞬を

記すに三千の筆足らず

自然の美妙神のわざ

自然の美妙神のわざ

さび行く秋

秋を淋しと咲く花の

桔梗 苧萱 女郎花

月草 野菊 蘭 や 萩

煩ふ秋やさびて行く

かくも物憂き野の秋も

秋てふ衣春とかへ
生命と愛をゆるやかに
雲と風とに薫らせし
あゝ今はたゞ怒猪の
牙を孕みし胤に
むくろをうけてあめつちの
涙を詩子に送るのみ
空に、林に、はた海に

暖き血潮波冷えて
こほりて霜に月寒く
雁行くかいと痩せて
夜は關山に風立ちて
草の戸破れて蟲憂ひ
はかなき光り星影の
それ薄命の露散るか
あはれ萬象の影暗く

非常遠からぬ秋のさび
瑠璃の葉末に風泣けば
世は今高し秋の聲
公孫樹の庭に落葉して
愁ひ盡きせぬ露繁く
秋も夕の色添へて
紅顔玉姿の愛は失く
時は闌け行く旅の秋

揚氣、いづくに人や笑む
生命斷へなんとばかりに
たゞ萬物に涙あり

あゝ無限かわが天地
あゝ有限かわが生命
唯夢に寝て夢に起き
事なく老いぬ五十歳

梅

谷の戸出でしうぐひすの
初聲はつこゑに春は梅訪ひば
南枝に香りいとふかう
一重の花や雪ならで

思へ、そのかみ昔公が
「ぬしなきき春な忘れそ」と
寂さびびし魂たましひ魄ひ籠めたりし
あめその梅やこゝに今

千里ににほふ梅が香の
霞の袖にうつりなば
鶯うぐいす醉ふて風通ふ
花に心やいかならん

藁屋の月の朧夜に
影やさゞめく梅が枝の
花の下臥し、香に酔へば
蓮月れんげつ尼にの草枕

枕べに

風たそがれて雲落ちて
夕陽静かにねむる時
浮世の床に冷えありと
鐘の音寒し枕べに
末野の夜半の草むらの
露に生命のうるほひを
洗ふ星影痩せ行けば

蟲の音しげし枕べに

もちづき雲にふき失せて
鳥の身じろき音たえて
窓外沈みはてぬれば
ともしびくらし枕べに
さむればねむる人の世に
冷えにし歴史長ければ
唯哀歎の峰の風

三世を痛む枕べに

五十の夕

魔縁に凍る暮れの鐘
音、諸共に即無常
鳥部の烟り今立てと
五十の夕、鞭上げて
五十の夕、人の秋

生命の絲をこゝに断ち
三途の川に舟うけて
別離の涙さをしづく

人間こゝに今浮世
善悪てふ果報今こゝに
五十の悟り今こゝに
希望の末路今こゝに
来ては浮世に五十年

去りては永劫に苔の下
あゝゆふべに観ずれば
げに一炊の夢にして

松風

我や我ともしら浪の
同じ浪間に舟浮かめ
行衛やいつくしら帆々の
おろかもあはれ俗の子よ

物の色をも分けあへじ
ともども他の色に染み
唯笑ひて唯泣くか
おろかもあはれ俗の子よ

寒星一天天高く
自然の歌に耳を濟め
隈無き雲に庵して
無限に清き月観よや

意馬千里に走るとも
心猿いかに荒らぶとも
唯衣食の獄の絲
解かん悟りの無きものか

墓前に立ちて

實にも假現の此の界
不堅如聚沫の主の身は
地水火風になりしかな

南無阿彌陀佛阿彌陀佛

人界不定憂宿世

泥梨の闇は涅槃無漏
とはにねむれよ秋や春

南無阿彌陀佛阿彌陀佛

佛魔一紙凡聖不二

一紙の境過わがまたて
入得あれよ三昧に

南無阿彌陀佛阿彌陀佛
生死の別は知らねども
生死一如と観る時は
唯成佛の尊しや
南無阿彌陀佛阿彌陀佛

花と蝶

花を眺めて蝶といひ

蝶を眺めて花といふ
花し蝶とにあらねども
蝶し花とにあらねども
ちひさき戀を生命にて
花をたづねて飛ぶ蝶の
一羽の影に色を添ふ
此の花こゝに色香あり
ほそき思ひを色香にて

蝶をむかへて咲く花の
にほひも甘き露に生く
此の蝶こゝに生命あり
あゝうるはしの天然に
あゝうるはしの花と蝶
千代に八千代に契りして
千代に八千代にあたゝかく

過ぐるを痛む

同じ笑まひの河流
昨日も今日も替らねど
昨日の水にあらずかし
夕波寒く風立てば
行衛を恨む岸の草
朝な夕なを涙にて
み空に冴えて照る月も
同じ光りは替らねど

昨夜の月にあらずがし
空に嵐の吹き立てば
龍躍つて雲起し
過ぎては恨む夜の雨
指十本に腕二本
昨日も今日もかはらねど
昨日の我にあらずかし
野寺の鐘の響く時
十年の昔おもほへば

おもひやいかに夕まぐれ
空吹く風に時飛びて
昨日と今日と過ぎ行けば
昨日の夢や今寒く
たゞ日月のうらめしや
かはればかはる浮世かな
うつればうつる時世かな

躑躅の花

あした露のなさけにて
咲きそめにける躑躅花
くれなる深く香の匂ふ
あたかきさちを身に享けて

詩人が家に草しげき
邸の垣邊に安らけく
小さき戀に舞ひ迷ふ
天蝶一つ酔はしめて

心ありげの花の面
たのしき笑みを含みつゝ
そよ吹く風にこと問ふて
空に答ふるそれのごと

花に彩雲消え行きて
月に躑躅をうかゞへば
玉なす露の戸を開けて
ほのかをりくる夜の香や

袖にゆかしき香をうけて
しばしはそさに佇立めば
あせゆく戀はたがためぞ
あせゆく戀はたがためぞ

枯 櫻

天地つめたき秋の暮れ
夕日の前にたゞずみで
おもひに沈む枯櫻

昨日の夢や今いかに

昨日あたくさかき花衣
染めにし甲斐や今は何に
雲か霞とやたはれぬ
昨日の夢や今いかに
あせゆく戀はたがためぞ
枯れぬては恨むも絲も
風に流れて花散りて
浮世のよき浮世の憂い姿

昨日の夢や今いかに
あゝ訪ひ来る鳥もなく
あゝ訪ひ来る蝶もなく
風に煩ふ枯櫻
昨日の夢や今いかに

夜と思

夜おごそかの幔幕に

天地別無く入りし時
あはれ窓外の蟲の音に
つめたくゆるゝ胸の戸や
夜氣、小燈の下にみち
草葉の露に入る星の
またゝく際にさゝやけば
心扉寒し小夜中の
月三更、夜長く

下界臥戸に沈む時
枕へ冷えてわが夢は
あゝいく度か破れけん
思ひは夜を呼ぶものか
夜は思ひを誘ふにや
知らず乞はなん夜の神よ
思ひを包め夢衣

堇

よみかへりたるあめつちの
芝生のつゆに身をしめて
やさしくあれしこのすみれ
ゆゝしき色やこむらさき
草葉のかげに、たをやめの
手にそだちけんなれが身は
はえなれ戀の衣きて
ゑまひ幽にあたゝかく

ちひさき、さだめ、いのちにて
風ゆるやかに香のほふ
のべに蝴蝶のゆめとめて
のどけき、こゝろ、日にあびて
花に寂びなくまだ若き
蟲も泣かせぬみどり葉は
あれて三日の女子が
初衣の袖に似たるかな

鳥部山

千草はてなきつゆ床に
露の戸開けて入る星の
夢より淡き月影に
蟲の音しめる鳥部山
非常悲愁の風更けて
芳魂迷ふ夜の色
涙ににじみ憂さに冷え
鐘の音こほる鳥部山

死と悲しみと恨みとを
鬼ととどめてとこしへに
斷頭臺の風通ふ
死の淵ふかき鳥部山
挽歌さびしく鳥泣けば
棺に涙、秋ふけて
落葉と行くかわが五體
烟と待つか鳥部山

二十四時を絶え間なく
うらみに迷ふほそ烟
彼岸の空に上るとも
恨みは盡きぬ鳥部山
五十餘年の生命は
鳥部の山の一烟は
あゝ終極の旅の園
あゝ亡滅の魂の園
(をはり)

明治四十三年十二月十五日印刷
明治四十三年十二月二十日發行

新詩松風典付
定價四十錢

不許
複製

著者兼
發行人

遠藤哲郎
宮城縣桃生郡北村五地

印刷人

山田英二
東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷所

博文館印刷所
東京市小石川區久堅町百〇八番地

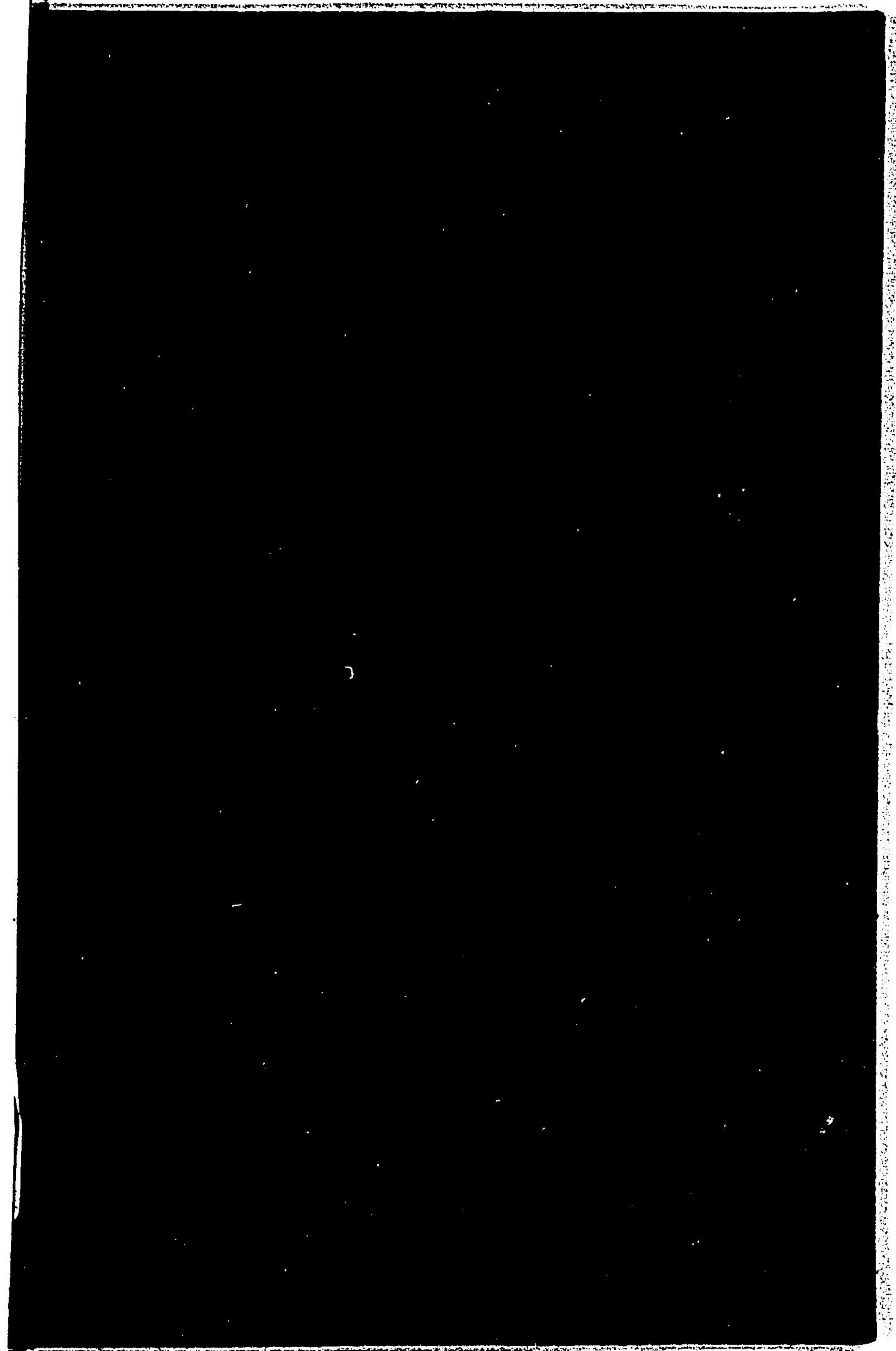
發行元
東京市小石川區大塚窪町一番地 中華堂書店
東京市神田區表神保町 東京堂
發賣元
東京市京橋區西紺屋町一良明堂

[The left page of the manuscript is mostly blank, with some faint, illegible markings and a dark vertical strip along the right edge where it meets the gutter.]

[The right page of the manuscript contains several columns of text, which are extremely faint and illegible due to the low quality of the scan. The text appears to be organized into a structured format, possibly a list or a table, with some characters that resemble numbers and letters.]

264

657



088107-000-7

特22-112

松風

遠藤 白葉 (哲郎) / 著

M43

DBG-0204

